

西上州の山岳信仰 下

Mountain Worship in the Nishi-Joshu region 3rd

堀 越 教 之*

Kyoshi Horikoshi

キーワード：山岳信仰，普寛行者，普寛講，御嶽信仰，妙義山御嶽信仰，神成山御嶽信仰

Key words : Mountain worship, Fukan performer, Fukan fraternity, Mt Miyogi-Kinkeizan, Mt Kannariyama

はじめに

「下仁田町自然史館研究報告 第7号 2022」に総論を述べ、山名2箇所を記載した。小沢岳と兄倉山である。続いて「下仁田町自然史館研究報告 第8号 2023」に金剛萱，四ツ又山，秋葉山^{あきやさん}，時丸御嶽山^{につくらやま}の御嶽信仰を紹介した。

今回は，下仁田町と繋がりはあるがやや離れている山岳信仰2箇所，妙義山御嶽信仰の「金鶏山・筆頭岩」と，富岡市神農原地域の北にある神成山^{かんなりやま}を紹介する。なお全体のまとめと補遺として上毛三山の御嶽教と普寛行者への信仰活動を含めて別稿を用意したい。

妙義山御嶽信仰「金鶏山・筆頭岩」

上毛三山と御嶽信仰

上毛三山は御嶽信仰が始まる以前から信仰の山岳であった。そのため上毛三山に御嶽信仰を入れるため，主峰を避けた山麓に御嶽教の神々を祀り，登山する信仰形態が建立された。

金鶏山

妙義山の表妙義の中心は，白雲山・相馬岳そして

金洞山であるが，御嶽信仰として入山した山岳は筆頭岩を含む金鶏山であった。筆頭岩は，現在一般的には「ひっとういわ」と音読みされている。古い時代には「ろーそくいわ」と呼ばれていたという。金洞山の中にも「蠟燭岩」という岩があり，区別する必要から「ひっとういわ」を選定としたと思われる。

富岡市妙義町菅原の菅原神社があり，菅原道真を祀っている。駐車場から石段を255段を登ると菅原神社に出る（第1図）。その上部に御嶽神社があり，ここで入山の儀式を行ってから尾根を登り，金鶏山を目指したという。今回，菅原神社から金鶏山の登山を試みたが，菅原神社を出るとまもなく道は無く



第1図 富岡市妙義町の菅原神社

2023年11月27日受付。2024年2月20日受理。

* 〒370-2615 群馬県甘楽郡下仁田町宮室61番地 常光寺

っており、夏草が覆っている頃で、信仰登山道は全く存在しなくなったのが現在である（第2図）。

旧道の尾根を突き上げ、新道の妙義縦断道路と合流する地点には、かつて普寛行者と思われる座像が建立されていた（第3図）。昔は旧道尾根に祀られていたものであろう。この座像石造は、令和元（2019）年10月12日～13日の台風の大雨により上山が崩れ、現在は存在していない。

金鶏山は妙義縦断道路ができて以来、道路への落石の危険から入山禁止と言われている。しかし登山口に行ってみると、登山禁止とは書かれていない。『お願い、金鶏山は岩が脆く落石もあり大変危険ですから入山をご遠慮ください。群馬県・妙義町』と書かれている。行楽車両の少ない平日を選び、落石には十分注意しつつ遠慮しないで、調査の為に登らせて頂いた。



第2図 菅原神社からの金鶏山を望む



第3図 普寛行者像と思われる石像（現在は存在しない）

金鶏山の石造物

石段がある登山口から雑木林の急斜面を登ると、岩峰の付け根に出る。ここに首部が欠落した石造物がある（第4図）。御嶽座王大権現の石造と思われる、「明治廿年十月一日 當所願主 清水平八」と彫られている。



第4図 首の無い石造物

ここから斜度50度ほどのチムニー状で、60 mほど登ると岸壁尾根道に出る。登山道はなく登りやすい箇所を探して登る。現在の登山靴で登っているが、山岳信仰活動の時代の信者は、^{せったわらじ}雪踏草鞋で登っていた。一段目の岩場を登りつめた所に、今にも落ちそうな石造文字碑があるが、摩耗していて文字は読みとれなかった。さらに 50 m 程登ると、尾根道に出る。尾根の小さな岩峰に石碑が建立されているが、どのようにして石碑を上げ建立したのか不思議に思う。

山頂に近い尾根に、かなり傾いた「御嶽座王大権現」の石造物が鎮座されている（第5図）。さらに尾根の最も高い岩峰に2基の文字碑が建立されている。北側には「山之神」、南側には「御嶽山神」と彫られているが、ともに年代は無記名である（第6図）。



第5図
金鶏山の「御嶽座王大権現」立像石造物



第6図 山頂の石造仏 左・山之神 右・御嶽山神

岩場を縦走し、高度岸壁中に「荼枳尼天」が祀られている（第7図）。狐に乗った女の神さまが、線で彫られ文字名も付けられている。建立年月日、奉納者の名は不詳である。「荼枳尼天」は、梵語 Dakini であり夜叉^{やしや}の類いである。胎蔵界曼荼羅の外金剛部に配される女性の悪鬼であり、人が死ぬ事を半年前に知りその心臓を食べようとする。この法を修する者には、自在の力を与える。日本では、この本体を狐の精神とし、「稻荷大明神」「飯縄大権現」と同一であるとしている。当日写真が良く撮れなかったので、「荼枳尼天」をスケッチブックに図録し、後に版画を創作した（第8図、口絵2-③）。

「荼枳尼天」の信仰は、これまで記載した「西上州の山岳信仰」の下仁田町の中には存在しない。筆者が住職を務める宮室山常光寺は、寺を守る三神体を有存し、中央が「荼枳尼天」、右に「愛染明王」、左に「弁財天女」が祀られている。



第7図 「荼枳尼天」石造物（口絵①参照）



第8図 「荼枳尼天」の創作版画

小結

妙義山の金鶏山は、入山が制限されていることもあり、御嶽信仰としては忘れられた山となっている。また石造物に記録が少なく、盛んだった年代が特定しにくい、明治の初め頃から昭和の初めの頃まで、山は繁盛したと思われる。

金鶏山は西上州の御嶽信仰の中で最も厳しく登山が困難な山域であり、この山域に石造物を設置することに感心する。しかし、金鶏山に入山した先達と講中が不明であり、石造物からの解明は限界がある。菅原神社上部の御嶽神社の存在と役割について、文献調査が必要であるが資料が残っているかは不明である。

金鶏山の「荼枳尼天」は、西上州の山岳信仰では他に存在しない。

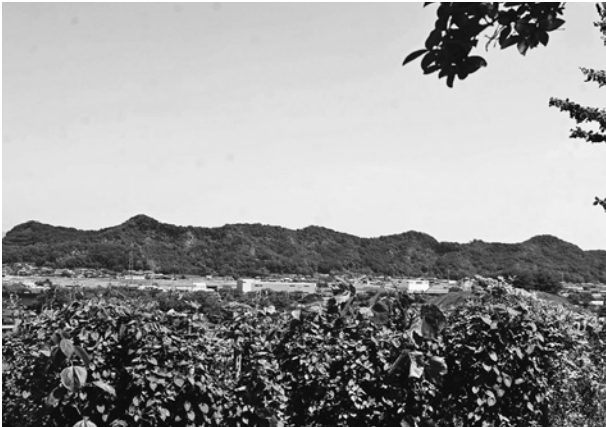
神成山の御嶽信仰

神成山

西上州富岡市の一部に信州街道と呼ばれる道がある。富岡市宮崎地区から上信電鉄の千平^{せんだい}駅を結ぶ街道約 8.8 km の部分である。古くから中山道の裏街道として利用された道で、信州へ通じる道としては女性でも楽に峠を越える事が出来たことから、「信州街道・姫街道」と呼ばれている。

宮崎から坂路を下って神成山の下を通る道が「姫街道」であるが、宮崎から坂路を下らず、神成山の

登山道を「姫街道」と呼ぶ事もあった。神成山は九箇所のピーク（峰）が有ることから、「西上州神成山九連峰」と呼んでいる（第9図）。神成山の登山道の「見晴台」は「姫天狗」と呼ばれるところもあり、第4峰には宇芸神社跡があることから尾根道を通る道が「姫街道」と呼ばれたかもしれない。また下丹生に向かう旅人も、宮崎から神成山に向かい、山頂から下丹生に下った道が早く、下丹生から信州街道に向かったと思われる。



第9図 馬山から見る神成山

神成山の名称は宇芸神社との関連から「神が成る山」であったろうが、この名称が盛んとなったのは江戸時代後半からであろう。普寛行者が御嶽教を広め、その弟子達が御嶽信仰をこの山を使い広めた時期からである。

神成山を中心にした御嶽信仰も、明治時代から神道関係と仏教関係に分かれる。富岡市下丹生地域から神成山に登る信仰道と、宮崎地域と千平地域を結ぶ山岳信仰道がある。また逆に、新堀地区旧新堀村の「新堀神社」から神成山に登る道もあり、御嶽教山岳信仰の登山道であった。

ここでは御嶽信仰の仏教関係を主にし、神成山尾根道を中心に記す。

新堀地区旧新堀村「新堀神社」からの登山道

新堀神社からの登山道が、御嶽教の信仰修行道であった。急斜面道を登った場所に山門の鳥居跡がある。さらに登ると神成山の吾妻山山頂で、新堀地区を見詰める石室が4体ある（第10図）。最も大きい石



第10図 旧新堀村を見つめる石室

室は 153 cmで、「萬延元子申年四月吉日」（1860年）と彫られ、御嶽教の普寛行者が遷化されてから約60年後の石室であるが、御嶽教とは関係無い石室である。もう1体文字が刻まれ、「嘉永三庚戌年十一月吉日 新堀氏子中」（1850年）である。残り2体はこれより前の石室であろうが年代は不明である。

新堀村の御嶽教

山門鳥居跡から登った場に御嶽教の石碑があり碑は割れている。「御嶽」の文字（第11図、左）と「月講社建之」の文字（第11図、右）が確認されるが、年号は不明である。



第11図 左：御嶽教の石碑
右：御嶽教の石碑（月講社）

五峰山山頂の石室と石灯籠

吾妻山山頂から五峰山に向かう頂に石室がある



第12図 五峰山の石室と石灯籠

(第12図)．神成方面を向く石室であり、「明和二歳四月吉日 施主神成村中」(1765年)と彫られ、高さ 79 cm、幅 54 cmである．五峰山頂には石室1体がある．高さ 118 cm、幅 218 cmの大きさである．これに並んで「常夜燈」と刻まれた、高さ 185 cm、幅 82 cmの大きな石造があり、神成に背を向け丹生に向いている．灯籠の裏面には「文政十年四月」(1827年)と刻まれている．

龍王山の山頂

神成山の最も高い山頂は龍王山であり、山頂に立つ大きな石碑に逢う(第13図)．「御嶽大神」と書かれ御嶽教の信仰であるが、神成地区に背を向け、丹生地区の方面を向いている．高さ 32 cmの石台の上に 235 cmの石碑である．年代は記録されていない．



第13図 龍王山山頂の「御嶽大神」



第14図 「五大龍王」と「三十六童子」

龍王山やや下ると「五大龍王」「八大童子・三十六童子」と彫られた2体の石碑があり、これも丹生方面を向いている(第14図)．五大龍王には「嘉永四年」(1851年)と彫られている．共に大きな石碑で、「五大龍王」は縦 35 cm、幅 76 cmの台座に、縦 131 cm、幅最大 56 cmで建立されている．並んで「八大童子・三十六童子」が縦 24 cm、横 92 cmの台座に、縦 149 cm、横最大 68 cmの石碑が建立されている．

① 五大龍王

「五大龍王」は中国密教に関連した信仰で、「人面蛇身」則ち顔面は人であり、身体は蛇である．龍王は水を祀り水神とされ、雨乞いの目的で信仰された．中国伝来の龍王と蛇神が混交し建立されたと思われる．ちなみに日本密教の中では「五大明王」が多く信仰される．五大明王は「不動明王」「隆三世明王」「軍荼利明王」「大威徳明王」「金剛夜叉明王」である．

② 八大童子・三十六童子

「八大童子」とは、不動明王につかえる8体の童子である．慧光童子^{えこう}、慧喜童子^{えき}、阿耨達童子^{あのかた}、指徳童子^{しとく}、烏俱婆識童子^{うくばが}、清淨比丘童子^{せいじょうびく}、矜羯羅童子^{こんがら}、制吒迦童子^{せいたか}である．「三十六童子」も大日如来の化身であり不動明王に眷属する(第15図)．これまでの記録で、兄倉山・秋葉山に「三十六童子」の部分が存在する事を述べた．「三十六童子」の全ての文字を石碑に彫った石碑は、西上州で神成山しか存在しない．なお「八大童子」と「三十六童子」の両方



第15図 「三十六童子」の説明

に入る童子は、矜羯羅童子と制吒迦童子の2童子である。

龍王山からの下り道

この先、道は二つに分かれる。神成山山頂に背を向け右に下ると神成地区の東に出て、左に下ると宮崎地区に出る。両道に仏教信仰の石仏が祀られている。神成山の山道で仏像が残されているのはこの地のみある。

① 御嶽座王大権現

神成山山頂から宮崎地区に向かうと大きな石碑がある（第16図）。「御嶽座王大権現」と文字が彫ら



第16図 「御嶽座王大権現」

れ、高さ 63 cmの台座に 205 cmの石碑である。裏に文字が彫られているが、ほとんど摩耗し「嘉永四年」のみが読める。建立したのは1851年である。権現は本地垂迹思想であり、日本の神々を仏教の仏や菩薩の仮の姿として現す思想である。「権」は「仮」の意味を示し、「仏が仮に神の姿で現れる」ことを思想とした。

② 文字碑「阿弥陀如来」と「三笠山刀利天」

御嶽座王大権現から神成地区へ下り、さらに登ると仏像1体と石碑2体がある。石碑2体がどこに祀ら



第17図 「南無阿彌陀佛」表面（左）と裏面（右）

れていたのか分からなく、台座の石は無く碑のみが倒れている。1体は「南無阿彌陀佛」と彫られ石碑で縦 83 cm、幅最大 37 cm、その上には梵字が彫られている（第17図、表）。阿弥陀如来の梵字でなく、最高の梵字（アジ）が彫られている。裏面には「湯殿山供養 寄附 願主佐藤廣男



第18図 「三笠山刀利天」

同行十二人」と彫られている（第17図、裏）。もう1体は倒れたままで「三笠山刀利天」と彫られている（第18図）。縦 113 cm、幅最大 26 cmで建立年号は裏にも無い。

③ 如意輪観世音菩薩座像

仏像1体は「如意輪観世音菩薩」である（第19図、口絵2-②）。初めて見た時はまったく変わった御姿であり、存在意義を持つものの、違和感のある座像であった。台座部 50 cm、像部 87 cm、全体 137 cmで如意輪観世音菩薩の石仏像では大きなものである。下部の座に文字が彫られている。「奉造立女中念佛講三十七人」「明和二丁酉歳十一月十五日」である（第20図）。すなわちこの菩薩を建立した年号は、明和2年（1765）であり、建立した人は念佛講の女性達が37人であると解釈できる。



第19図

「如意輪観世音菩薩」座像



第20図

「如意輪観世音菩薩」台座



第22図

「制多迦童子」の石像



第23図

「制多迦童子」の石像

不動明王の山

上記した「御嶽座生大権現」の石碑から宮崎地区へ下ると、見事な石造物が建立されている。不動明王石像、制多迦童子石像、制多迦童子石像である（第21図、口絵2-①）。不動明王の身長は 85 cm で、火焰を入ると 118 cm、さらに台座が 35 cm である。不動明王の裏面に「明治十九年四月二十八日」の記録があり、28日は不動明王の縁日である。制多迦童子（第22図）は台座 32 cmの上に 62 cm立像であり、制多迦童子（第23図）は台座 30 cmの上に 58 cmの立像である。不動明王の下に、胸より上の部分が切られ、頭部、背部が欠けている石像がある（第24図、左）。残った部分に剣を持つ左手がある。おそらく三十六童子の一体であり、第3童子



第24図 「不動明王」の石像



の「不動明王」であると思われる（第24図、右）。不動明王の山の奥に石碑が2体ある。一つは「意和羅天

大頭羅神天」台座 80 cm、石碑 101 cmである（第25-1図）。もう一つは「天之御中主尊天」と彫られ、台座 67 cm、石碑 136 cmの大きな石碑である（第25-2図）。「意和羅天」と「大頭羅神天」は御



第21図 「不動明王」の石像



第25-1図

「意和羅天 大頭羅神天」の石碑



第25-2図
「天之御中主尊天」の石碑

嶽教の神である。前述した尾根に「御嶽座王大権現」があり、ここを向かって左に「三笠山刀利天」が有るので、右のこの地点には御嶽三神である「八海山提頭羅神王」があるものと思ったが、その存在は無い。文字が変わって「大頭羅神王」となり、存在したものと思われる。

青面金剛

不動明王からやや離れた場所に、見たとたんには青面金剛と思われる石仏が建立されている（第26図）。縦 78 cm, 幅最大 44 cmである。しかし良く視ると青面金剛とは異なる仏像である。青面金剛は庚申立像とも言われているが、上右手に鐺を持ち、上左手は法輪、中右手に矢、中左手に弓、下右手に独鈷、下左手童子像を持った立像である（第27図）。ところが神成山にある像は、手は四本であり、上右手は法輪、上左手は鐺、下右手は蛇、下左手は縄である。青面金剛といえるのかは疑問であるが、石像青面金剛は約されたものが多い。



第26図 「青面金剛」？の石像



第27図 常光寺にある「青面金剛」図録

普寛行者、馬頭観音、地藏菩薩

神成山から宮崎地区方面に向かうと、最後の地に御嶽信仰の石仏がある。普寛行者の文字石碑があり、「普寛霊神」と彫られている（第28図）。縦 60 cm, 幅最大 29 cmで裏面は何も無い。

次に馬頭観音が仏像として建立されている（第29図）。縦 48 cm, 幅 24 cmであり顔部分が消失されている。

そして頭部がない地藏菩薩が建立されている（第30図）。石の頭部を入れ縦 100 cm, 幅 31 cmである。この3体は全て建立年号が彫られていない。



第28図 「普寛霊神」石碑



第29図 「馬頭観音」立像



第30図 「地藏菩薩」立像

旧姫街道の石造仏

神成山を下り旧姫街道には、石造仏や庚申塔が多く存在する。しかし登山をしない条件で信仰する石造仏は山岳信仰と言えないので、この地域は御嶽教等の山岳信仰とは考えられない。

ここでは旧姫街道に存在する仏教関係の石造仏を3点紹介する。

- ① 「南無阿弥陀」の文字の書は素晴らしいものであり、「佛」が無くなっているのが残念である（第31図）。年号不詳、縦 162 cm、幅 42 cm。



第31図 「南無阿弥陀佛」石碑

- ② ウーンと読む梵字は阿閼如来を意味する。台座の縦 31 cm、梵字の縦 57 cm、幅 62 cm。阿閼如来を表現した石造仏はここにしか存在しない（第32図）。



第32図 「梵字（ウーン）」石造仏

- ③ 「如意輪大士」は如意輪観世音菩薩を意味する。縦 127 cm、幅 42 cm、仏像部縦 55 cm。「文政十二己丑年霜月吉日 新堀村 女人講中」と彫られており、神成山の如意輪観世音菩薩と同様に、新堀村の女性信者が1829年11月に奉納した仏像である（第33図）。



第33図 「如意輪大士」石仏

小結

神成山の山頂付近の石造物は、おそらく下丹生の人々が設置したものと思われる。富岡市下丹生から登山した山岳信仰も、御嶽教信仰が中心であろう。下丹生から登山する道にも文字碑石造物が多く存在するが、今回は調査していない。

神成山山頂から宮崎方面に行くと仏教的御嶽教石像仏が現れる。また、神成山山頂から宮崎方面に向かい、途中から神成方面に向かうと仏教的御嶽教石像仏および石碑が現れる。

宮崎地区から神成地区に下り民衆が住む場所に、御嶽教信仰と思われる石碑が存在する。しかしここに住む住人は、登山をしないで信仰したと思われるので、御嶽信仰の記録とはしなかった。

まとめ

「西上州の山岳信仰 上、中」の7山岳に加え、「下」では西上州の御嶽教の信仰に関連した富岡市の2山岳、上毛三山の1つである妙義山の金鶏山・筆頭岩と神成山を取り上げた。

妙義山は古くから信仰の対象となってきた上毛三山の1つであるが、御嶽信仰の時代には、これまで信仰した山を離れた金鶏山・筆頭岩が選ばれている。登山道は危険な岩山道である。御嶽教の石造物がほとんどである。「茶枳尼天」の彫刻画は、西上州の中で妙義山の金鶏山の上に祀られている。

神成山は古代の道であり、中山道の裏街道として利用された。明治の初代頃から御嶽信仰として石造物が神成山に奉納された。石碑が多い中で、不動明王や如意輪観世音菩薩の石像は美事である。

参考文献

- 安中山の会 編（1990）群馬の山歩き130選。上毛新聞社。265p.
- 藤田庄市（2020）現代山岳信仰曼荼羅。山と溪谷社。237p.
- 福田アジオ他編（2006）日本民俗辞典。吉川弘文館。614p.
- 古川順弘（2018）神と仏の明治維新。歴史新書。洋泉社。207p.
- 堀越教之（2022）西上州の山岳信仰 上。下仁田町自然史館研究報告。7。11-20.
- 堀越教之（2023）西上州の山岳信仰 中。下仁田町自然史館研究報告。8。1-12.
- 今泉淑夫編（1999）日本仏教史辞典。吉川弘文館。1117p.
- 岩鼻通明（2017）出羽三山 山岳信仰の歴史を歩く。岩波新書。219p.
- 上毛新聞社編（1979）群馬県百科事典。上毛新聞社。980p.
- 前田良一（2006）役行者。日本経済新聞社。402p.
- 松尾 翔（2007）西上州山村の石仏たち。青娥書房。287p.
- 三橋 健（2008）日本の神々事典・神徳由来。学習研究社。311p.
- 宮家 準 編（1985）御嶽信仰。民衆宗教史叢書。雄山閣。300p.
- 中村 元・福永光司・田村芳朗・今野 達（1989）岩波仏教辞典。978p.
- 中村 元・久野 健 編（2002）仏教美術事典。東京書籍。1035p.
- 中田祝夫（1980）日本霊異記（下）。講談社学術文庫。320p.
- 南牧村文化財調査委員会編（1991）南牧村の石造文化財。南牧村教育委員会。62p.
- 南牧村誌編さん委員会編（1981）南牧村誌。南牧村。1543p.
- 日本風俗史学会編（1979）日本風俗史事典。弘文堂。812p.
- 綿織亮介（1983）天部の仏像事典。東京美術。288p.
- 御嶽教大本庁宣教部（1979）御嶽教の歴史 開教九十五年の歩み。御嶽教大本庁。272p.
- 大久保良峻他（2009）八宗総覧・日本仏教編年大鑑。四季社。571p.
- 太田昭彦（2016）山の神さま・仏さま 山と溪谷社 ヤマケイ新書。237p.
- 佐々木宏幹他監修 池上良正他編集（1998）日本民俗宗教辞典。東京堂出版。658p.
- 下仁田町教育委員会編（1976）下仁田の石造文化。下仁田町教育委員会。111p.
- 菅原信海（2001）日本人の神と仏。日光山の信仰と歴史。法蔵館。259p.
- 菅原信海（2003）日本人の神たち仏たち。春秋社。226p.
- 菅原信海（2007）日本仏教と神祇信仰。春秋社。248p.
- 菅原壽清（2002）木曾御嶽信仰・宗教人類学的研究。岩田書店。354p.
- ウエストン、W（山崎武生訳）（1976）日本アルプス・登山と探検。日本山岳名著全集 10。三笠書房。304p.
- 宇治谷孟（1992）続日本紀（上）。全現代語訳 講談社学術文庫。432p.
- 和歌森太郎編（1975）山岳宗教の成立と展開。山岳宗教史研究叢書。名著出版。388p.
- 安丸良夫（1979）神々の明治維新。岩波新書。214p.
- 義江彰夫（1996）神仏習合。岩波新書。224p.

（要 旨）

堀越教之（2024）西上州の山岳信仰 下。下仁田町自然史館研究報告。9。1-10.

「上」に記した小沢岳・兄倉山、「中」に記した金剛萱・四ツ又山・秋葉山・時丸御嶽山・日暮山の7山に加えて、「下」では下仁田町に近い富岡市に存在する妙義山御嶽信仰と、神成山御嶽信仰を紹介した。神成山は登山者が多いが、山岳信仰の登山者はほとんどいない。仏教関係の石造物は長く保存したいものであるが、現状はたいへん厳しい状況である。